

「子ども主体」の芽を育てよう！

うちの園の保育って、「子ども主体」なのかな？
私の今日の保育は？ あの先生のあの保育は？
そんな迷いと不安の中にある「子ども主体」について、
前任のことも園で「子ども主体の保育」を追い求めてきた
宮里暁美先生と一緒に、考えてみましょう！

お話

宮里暁美さん
お茶大アカデミック・
プロダクション特任教授

前職は、文京区立お茶の水女子大学こども園園長。
『0-5歳児 子どもの「やりた
い！」が発揮される保育環境
—主体的・対話的で深い学び
へと誘う』（学研）『耳をすま
して目をこらす』（赤ちゃんと
ママ社）など著書多数。



「子ども主体」の 来し方行く末

少し昔の話になりますが、平成元年の「幼稚園教育要領」改訂のときに、幼児教育が「環境を通して行う教育」であることが示されました。子どもが主体的に取り組んでいくためには、心が動く環境が必要ですから、これがいまの「子ども主体の保育」の源流と言えると考えます。

このとき現場では、「環境をつくらせたら、子どもが何かするまで、保

育者はただ待つ」という間違った解釈や戸惑いが広まったことを記憶しています。

そこで、その次の改訂（平成10年）では、保育者の多様な役割について明示されました。子どもを受け止めるだけではなく、活動を提示したり、モデルとしてあそびをつくり出したりする役割であるとか、「何もしない保育ではない」ということがアピールされたわけですね。最近の改訂（平成29年）では、それがさらにブラッシュアップされたわけですが、いまだに、「子ども

主体」に悩む園や保育者が多いことを考えると、「子ども主体」というものが、なかなか伝わりにくいのかなと思うこともあります。

子どもが自ら

つくり出すという

営みだけは、外せない

「子ども主体」とはつまり、「子どもが主人公」ということ。

あそびを中心とした園に限定した保育方法だと思っている人もいますが、保育の形態が何であつても、「子ども主体」の保育は可能です。

しかし、保育者が「こういうふうによりやすい」と指示する活動だけでは、子どもが主体性を発揮する余地がなく、主体性は育たないだろうと思います。

だからといって、子ども発案のプロジェクト活動をしなくてはならないとか、部屋にコーナーを設置しなければ子ども主体にならないというわけではありません。日常のさまざまな場面にも、子どもが何かアイディアを出したり選んだりという余地は十分にあります。

「子ども主体」は 「褒め」を連れてくる！

例えば、金曜日の帰り支度を思い浮かべてください。

金曜日は持ち帰る荷物がいろいろありますね。保育者の指示通りに、子どもが一つ一つ持つてくる……これだと漏れや抜けはないかもしれませんが、子どもたちはただ言われた通りに動くだけです。

ときには「金曜日は、何を持って帰るのかな？」と投げかけてみると、子どもたちは考えます。「○と△△と◇◇だよ」など自分で気づく。これも、主体性を発揮する姿だと思えます。

また、その投げかけは、「よく気がついたね！」「覚えていてすごいね」と褒める機会をつくることにもなります。子どもが主体性を発揮すると、必ず褒められ、より意欲が増す好循環をもたらします。

そのひと手間が 「子ども主体」の 芽を育てる！

同じように、当番活動なども、

子どもの主体性を大いに発揮させる活動になります。チャボの世話の基本は教わりつつも、当番をどの順番でやるのか、どんなふうにして話するのか、子どもたちが考える余地を残す。そうするとその活動は、言われてやったことではなく、自分たちで考えた、自分たちの活動になります。

持ち帰りの確認も当番活動も、保育者が決めて指示する方が、無駄がなく、間違いがありません。けれども、そのひと手間を置くかどうか……ということだと思います。

その程度のことであれば、保育のあらゆる場面で、やろうと思えばやれるのではないかと思います。

指示の多さは「子ども主体」の芽を摘む!?

子どもは、大人の思いもよらないことをやり、大人が「何それ! すごい!」と驚いたり褒めたりしてくることに喜びを感じます。主体性を発揮した結果、褒められる経験をする、また意欲的にやってみようと思う好循環が生まれます。

もちろん、子どもの年齢や発達によって、注意や指示が必要な場合もあるでしょう。しかし基本的には、細かく指示をしたり、注意事項を伝えすぎたりすると、子どもの主体性の芽を潰してしまうこと

になります。保育者側にゆとりがあるときは、子どもたちが発案したり考えたりする余地が残るようなかかわり方をしていきたいですね。

「資質・能力の三つの柱」で考えてみる

左の図は、皆さんもよくご存知の「三つの柱」です*。
ここでいう、個別の知識や技能の基礎は、教え込まれたものではなく、子どもが主体的に獲得したものであるということが重要です。子どもたちは、自分の知っていることやできるようになったことを、やってみせてくれたりしますよね。獲得した知識・技能は、使いたくなるわけです。さて、それ

をどう使うか? というのが、まさに主体性の発揮しどころです。子ども発案の活動なども、ここに入るものでしょう。
そして主体性を発揮した結果、もっとよくできるようになりたいという意欲や、もっとよく知りたいという探究心、だれかの役に立つことに知識や技能を使いたいという人間性につながっていくわけです。

- 製作コーナー(自ら取り組める)
- ◎子どもがやり出したことに気づき、承認し見守る保育者
- ◎子どもがしたことを丁寧に受け止め省察する保育者

「エピソード」

こども園で、ひな祭りの季節に、子どもたちと玄関ホールにひな人形を飾りました。地域の方が寄贈してくれた立派なもので、本棚を片付けて移動し、たくさんの人形たちを飾り終え、子どもたちは大満足! そこへ、ちょうど来客があり、

- ◎発案する子どもを大事にする保育者
- ◎感心する保育者

こんなにすてきな
おひな様見てほしいな。
ここにあるよって、
お知らせしよう!

そうだ! 紙に書いて
貼っておこう! ここが、
いちばんよく見えるよね!

知っていること・
できることをどう使うか
思考力・判断力・表現力等の基礎

子どもたちは胸を張って「これを見てください!」とご案内。お客様も「わあ、すてき」なんて、ノリ良く応じてくれました。すると、子どもたちの中に、「このすてきなおひな様を、もっと多くの人に見てほしい!」という思いが芽生えたようです。その日の夕方には、ひな人形の観覧ご案内の貼り紙が2枚できていました。
その背景には、これまでの園生活の中で「文字」に親しんできた5歳児たちの知識・技能があります。貼り紙が目立つ場所を探したり、いったんホールから出て、入ってきたときに、ひな人形がどんなふうに見えるかを確認したり、知っていることを使ってよりよい掲示をしようとしていました。

どのように
社会・世界とかかわり、
よりよい人生を送るか

学びに向かう力・人間性等

どのように学ぶか
(アクティブ・ラーニング)

学習評価、カリキュラム・マネジメントの充実

保育のあらゆる場面にある「子ども主体」の芽

やかんに入ったお茶を「私が注ぐ!」と言い、コップに注いで回る3歳児。これも、主体性が発揮されている姿です。あそびをつくり上げるといった大きな事柄だけではなく、こうした細かなことに目を向けると、子ども主体の芽は、保育の中のあらゆる場面にあるのではないのでしょうか。

また、乳幼児期の体験としては、思いを発信するばかりではなく、「感じる」ということが大事です。「〜したい」という言動になる手前の、「感じる」部分も、ぜひ一緒に味わい、楽しんでもらえたらと思います。

子どもと一緒に感じ、体験していくことで、子どもたちに「〜したい」が芽生え、いろいろなことが起こっていきます。子どもたちのその思いをキャッチし、支えたり応じたりしながら保育をつくる。それが、「子ども主体」の保育のコツなのだと思います。

- 絵本コーナー
- 製作コーナー(自ら取り組める)
- ◎個の取り組みを見守る保育者

「字」っていいな。
これ書けるよ! ほら書けた!

何を知っているか
何ができるか

個別の知識・技能の基礎

※学習指導要領改訂に向けた方針として出された、「育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念」。「中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料」を基に、宮里先生が加筆し、編集部で作図。